

# 米國の男女混合教育

在米國 西山 慈 治

## 一、所謂混合教育は何ぞや

米國の中學 (High school) 大學 (University) に於ては目下専ら男女混合教育を始めて居る、即ち一學級に同時に男女生徒を合同して教授する方法である。其の教育的可否に就ては今更論ぜないで只此には米國の混合教育の狀態を概説するに止めやう。

米國の混合教育に就て述ぶる迄に米國女子が如何に家庭に教育されし乎或は米國の女子と社會上の地位等に就て少しく述べて置く必要がある。

## 二、米國婦人の女子教育

米國婦人は其の女子の生るゝに於て殊に喜色を以て迎へ、男子の出産には却て苦い顔を以てして迎ふる、此れは女子の地位高き米國の風俗をよく表白して居るものと思はれる、そして男子の教育よりも女子を教育することに甚だ熱心である、一例を以てすれば米國の極下層社會で冬の嚴寒尙ほ

跳足で外出せねばならぬ赤貧であれば男子には靴を與へず、女の子には靴と上衣とを與ふる習慣なのである、中流以上では男子は商業學校へ入れて卒業後速ちに會社に働かせて別に意とせぬが女子には最高教育を施すに躊躇せぬのみならず、男子を放任主義を以て教育する場合には女子には加護主義を以て教育する凡て、家庭に於て男女の教育法を峻別して女子を貴重するのである、此の家庭教育の精神は社會の女子を待遇する精神に胚胎して居る、即ち米國の社會は婦人を遇する至つて寛にして男子を待つ甚だ冷淡なりと謂つてよろしい、

## 三、所謂女尊男卑

何が故に米國は女尊男卑なる乎、女子の能力が遙かに男子の上にある乎、あらず、女子の權能男子に長ぜざる乎、あらず、然らば何故ぞといふに吾人は次の如く觀察せん。

一、かよはきものは女子なり此れを助け愛するは神の御心に適へりてふ基督教の見解より來る。  
二、米國に於ける女子の數は僅かに男子の半數に

満たす、此れ少きものは貴重せらるゝて、經濟的原則より然る。

三、女尊男卑は米國の一大習慣にして習慣上之れを異とせざるに由る。

四、女子を貴ぶの極女子に高等教育を施し、爲めに女子にして賢明往々男子に秀づるものあるに到りしこと、且は女子の職業を比較的社會の高位に置くこと。

斯くて女子は男子の上にあり（少くも男子同等と彼女自身も思へり）

四、女子の學校

米國に於ける女學校の最も多きは宗教的趣味を帶べる學校にして女子神學校最も多し、次は職業學校である、裁縫或は商業（タイプライク）等が最も多い、其の多くは女學校は殆ど満員の姿で追々と男子の大學を襲ひ始めて學窓に男子と力を比べんとする勇婦が多くなつた、大低の大學では男子以外に女子をも收容するに到つた、此れを男女混合教育（Co-Education）と謂ふ、併し、此れに反對してゐるのはチカゴ大學等で混合教育は益々其

の勢力を擴張して來たのである、日本側の教育家から見れば速ちに風儀の問題に想到するであらう、併し米國では風儀如何のことは問題に上らないのである、何となれば男女の交際は自由であつて必ずしも學校で男女を一級に集めるからといふて其れが速ちに風儀の上にも何物をも現出せぬからである、何となれば、彼等は學校に入學せぬ以前、男女共に遊び共に學び共に生活して居るからで、學校教育の當局者は敢て其の責任に預らぬ譯である。

目下の混合教育に於ける問題は風儀上の問題といふよりは寧ろ男女能力如何の問題に歸結してゐる、即ち女子は男子と同じく精力を等しく同一事物に集注し得る乎なのである、換言すれば女子は男子と其の研究の結果を産出し得る乎、此れは米國教育界現下の問題である、其の統計の如きは學藝の成績等によつて積極的論者が勢力を占めるやうになつて爲めに中學大學に來つて女子の學ぶもの日に加はつて來るのである、同じ學窓の下に學び、共に手に手を携へて校門

を出づる男女の學生の状況をば日本教育家の座右にパノラマで見せたいものである、しかも大學生二十五六前後の男女學生なので……併し米國の男女學生には犯すべからざる相互の人格的觀念が

強いから毫も相變するに足らないのである、而して男女交際の自由、其の自由は日本人のある者が解するが如く氣儘自由の其れではないである。

小 兒 の 痔 疾

追々寒さが加はるので持病のある人は氣候に惱まされる者が多くあらう、其の中にも痔疾のある人は冷える爲め病熱が進むので餘程難義するであらう小兒の痔疾は此際何ういふ注意をしなければなるまいか、醫學博士瀨川昌番氏曰く小兒の體質にはいろ／＼の性質があつて便秘するものあれば又兎角胃腸が弱くして僅な事にも胃され易く下痢し易い小兒もあり、處で痔疾の多くあるのは便秘する小兒にあるので、脱糞の時苦痛を與へるから頻りに泣いて用便するのを呑みます、夫れを強いて用を便せしむるときは遂に血脈を附着せしむるやうになり之が度々になると小兒の痔疾となつて仕舞ひます爾うすると親達は大に心配し「小兒の時から痔のあるやうでは大人になつて何んなに痔を病むだらう」と取越苦勞をなさるものが多いやうです

去れど小兒の時代の痔疾は大人とは違つて痼質の病氣となるものではありませんが、尤も其儘打捨て、置けば痼疾とならぬとも限らないが醫藥を用ゐれば爾う心配せずとも根治し得るもので、一休小兒が痔を病むと云ふものは秘結して居るものを母親が無理に努責させて用便させるのが第一に悪い、故に小兒が痔疾に冒されたと思つたなら、決して努責させては不可ません、之れが一番禁物であります、扱小兒の時なら便秘症も下痢症も治療し得られるものですから教師の差圖を仰ぎ取越苦勞をさせぬやうにしたいものです、醫師の差圖があり乍ら余り取越苦勞ばかりするのは却つて青兒上に宜しくありません